



## 老親扶養意識と介護に関連するストレス評価の関係

著者	尹 靖水, 中嶋 和夫, 金 貞淑, 巖 基郁, 黒木 保博
雑誌名	評論・社会科学
号	85
ページ	67-81
発行年	2008-03-31
権利	同志社大学社会学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000012027">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000012027</a>

# 老親扶養意識と介護に関連する ストレス評価の関係

尹 靖水・中嶋和夫  
(梅花女子大学) (岡山県立大学)

金 貞淑・巖基郁  
(慶尚南道庁) (群山大学校)

黒木保博  
(同志社大学)

## I. 緒言

東アジア地域は、高齢者扶養に関しては欧米諸国とは異なる文化的・歴史的背景があり、それは儒教の「孝道」とされ、例えば韓国の「老人福祉法」(1981年)や「敬老憲章」(1982年)に着目するなら、そのことが濃厚に反映した内容で構成されていることが知られている。すなわち、韓国の老人福祉法は、法制化の過程から家族扶養優先を義務とし、老人福祉法第3条「家族制度の維持・発展」では、「国と国民は敬老親孝行の美風良俗に基づいて、健全な家族制度が維持発展するよう努力する」と規定している。このことは、韓国では、老親扶養(日本の「介護」より広義)の問題が、儒教倫理による「敬老親孝行」を根底に、老親は家庭で孝養することの当然視が国民の一定のコンセンサスを得ていることを示唆するものである。同様に、中国でも憲法や婚姻法、さらには「老人權益保障法」(1997年成立)において、老親扶養を明文化している。そこでは高齢者の生活、健康、社会参加の状況を向上させるため、国や社会の責任を明確にしているものの、あくまでも原則は「家族扶養」とな

っており、法律で明記している扶養の範囲は、経済的な支援や世話、病気の時の医療費負担や介護までを含む極めて広いものとなっている。

しかし、昨今の東アジア地域は、社会構造の近代化・産業化の過程で伝統的な家族構造が急速に解体し、家庭と職場が分離し、また政治的・宗教的・教育的機能は徐々に分化し縮小する様相を呈している。そのため、高齢者関係では、高齢者の急増やそれに伴う認知症高齢者等の家族介護が、急速な世帯構造の縮小、女性の高学歴化と社会進出等を背景に極めて困難な状況をもたらし、大きな社会問題となっている。

従来の研究業績によれば、潜在的ストレスとストレス評価との関係に於いて、肯定的なストレス認知が否定的なストレス認知にとって内的資源となりうるとされ、この理論を介護場面に援用した研究では、介護に関連した満足感や自己成長感は介護負担感を緩和する<sup>(1)</sup>としている。ただし、同様な内的資源として位置づけられる「老親扶養意識」が、介護者の潜在的ストレスや肯定・否定的なストレス認知に対してどのような関係にあるかは、ほとんど検討されていない。しかし、儒教に依拠する「孝」に関する認知やその実践としての老親扶養は欧米文化には認めにくい文化的・歴史的特徴として位置づけられていることを考慮するなら、介護場面における家族介護者の老親扶養意識の機能的な特徴を明らかにすることは、今後の韓国のみならず東アジア地域の高齢者の家族介護に関連した社会福祉サービスの展開にとって重要な知見を提供してくれるものと思料する。

そこで本研究は、韓国データを基礎に、在宅高齢者の主介護者の老親扶養意識がストレスである要介護高齢者の身体機能の低下とストレス評価のプロセスにあって、どのような効果変数として機能しているかを明らかにすることを目的とした。

## Ⅱ．研究方法

本調査研究は、調査地域を人口規模と地域特性を考慮して、韓国の中都市と

して慶尚南道昌原市、忠清南道天安市、全羅南道順天市の3地域を選定し、調査協力が得られた在宅高齢者の家族介護者のみを調査対象とした。調査開始に先立ち著者のうちの3名が調査員となり、地域の総合福祉センターの責任者に対して調査目的、内容等を説明し、調査協力を求めた。その後、前記責任者が世帯別に調査票を配布し回収した。ただし、調査開始時に回答を望まない場合は、拒否可能であること、また匿名性やプライバシーを保証するために無記名方式が採用されていることを伝え、了解が得られた世帯のみを対象とするよう依頼した。

調査内容は、家族介護者の性、年齢、同居高齢者の性、年齢、高齢者からみた介護者の続柄に加え、高齢者の生活依存度、介護者の老親扶養意識、介護負担感、介護肯定感で構成した。

高齢者の介護者に対する生活依存度は、毎日の日常生活場面での介護（介助）の必要度として、日常生活動作（Activities of Daily Living；ADL）に着目し、世界的に広く使用されている「Barthel Index」<sup>(2)</sup>で測定した。Barthel Indexは、合計10の課題（食事、移乗、整容、トイレ動作、入浴、歩行、階段、更衣、排便自制、排尿自制）で構成され、信頼性と妥当性が検証されている<sup>(3)</sup>。

介護者の老親扶養意識は、「東アジア地域用老親扶養意識測定尺度」<sup>(4)</sup>の下の概念とされる「手段的援助意識」と「情緒的援助意識」のうち、直接あるいは間接的に老親の生活安定を図る身体的介護、経済的援助に対する援助意識を問う「手段的援助意識」に着目して測定した。その理由は、実際に介護に携わっている今回のような介護者を対象とした場合、とりわけ情緒的側面よりも手段的側面からの提供サポートが不可欠であると判断したことに他ならない。回答は、「そう思わない」から「そう思う」までの5段階で求めた。

介護者の介護負担感は、「Family Caregiver Burden Inventory（FCBI）」<sup>(5)</sup>で測定した。FCBIは、介護負担感を大きく3つの領域（「社会活動に関する制限感」、「要介護高齢者に対する拒否感情」、「経済的逼迫感」）から測定する尺度である。各領域にはそれぞれ4項目が配置され、合計12項目により評価するものである。回答は、「まったくない」から「しばしばある」までの3段階で

求めた。この FCBI は、信頼性と妥当性が日韓データで確認されている。

介護者の介護肯定感は、櫻井<sup>(6)</sup>がその下位概念として探索的因子分析で抽出した2因子、すなわち「介護状況への満足感(9項目)」と「自己成長感(3項目)」に所属する12項目を使用した。ただし、櫻井らの報告では、「介護のおかげで難しい状況に対処する力など、自信がついた」の項目は「介護状況への満足感」因子に所属していたが、本調査研究では、当該項目は本来「自己成長感」を反映する項目であると判断した。従って、最終的には「介護状況への満足感(以下、介護満足感)」8項目、「自己成長感」4項目で評価するものとした。なお、回答は、「まったくそう思わない」から「非常にそう思う」の4段階で求めた。

本調査研究では、介護者の老親扶養意識と介護負担感に関する仮説モデルとして、Lazarus らのストレス認知理論<sup>(7)</sup>に基礎を置いた Cicirelli の介護の動機付けに関する仮説モデル<sup>(1)</sup>を援用して独自のモデルを構築した。換言するならば、Cicirelli の介護の動機付けに関する仮説モデルを参考に、さらにストレス認知理論に依拠して老親扶養意識を取り込んだ新たな因果関係モデルとも言える。具体的には、図1に示したように、「高齢者の生活依存度としてのADLが、直接的に介護者の介護負担感に影響すると同時に、それが介護者の手段的扶養意識や介護肯定感といった要素を介して、介護負担感に影響する」と仮定した。なお、このモデルの検証には構造方程式モデリングを使用した。構造方程式モデリング<sup>(8)</sup>は、「直接観測できない潜在変数を導入し、潜在変数と観測変数との間の因果関係を同定することにより、社会現象や自然現象を理解するための統計的アプローチ」と定義されるように、さまざまな変数間の因果の連鎖や各種適合度を扱え、あらかじめ設定した仮説モデルの検証に適した統計手法である。前記の因果関係モデルのデータに対する適合性は、Comparative Fit Index (CFI)、Tucker-Lewis Index (TLI)、Root Mean Square Error of Approximation (RMSEA)により判断した。一般に、CFI、TLIは0.9(または0.95)以上、RMSEAは0.1(または0.06)を超えないことがデータと矛盾しないモデルと判断するための基準とされる<sup>(8)</sup>。本調査研究では、ADL指標として採用した Barthel In-

## 老親扶養意識と介護に関連するストレス評価の関係

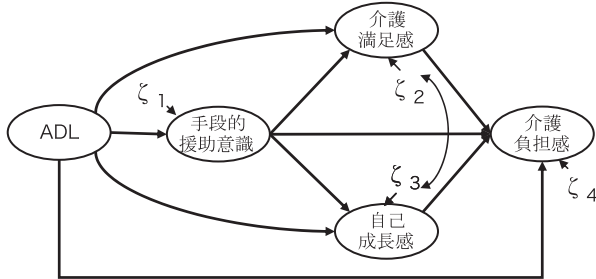


図1 老親扶養（義務）意識と介護負担感に関する仮説モデル

dex に 2 値型のカテゴリカル変数が含まれていたことから、当該尺度の観測変数はカテゴリカル変数として扱った。

### Ⅲ. 研究結果

#### 1. 対象者の属性等の分布

回収されたデータは、昌原市が 225 名（回収率 75.0%）、順天市が 171 名（回収率 85.5%）、天安市が 66 名（回収率 66.0%）の計 462 名分であった。家族介護者の性別構成は、男性 60 名（13.0%）、女性 401 名（86.8%）、不明 1 名（0.2%）であり、その平均年齢は 47.7 歳（標準偏差 9.42、範囲 24–83）であった。高齢者の性別構成は、男性 88 名（19.0%）、女性 371 名（80.3%）、不明 3 名（0.7%）であり、その平均年齢は 77.7 歳（標準偏差 6.90、範囲 65–99）であった。

高齢者からみた介護者の続柄は、「配偶者（内縁を含む）」18 名（3.9%）、「息子」56 名（12.1%）、「息子の嫁」287 名（62.1%）、「娘」93 名（20.1%）、「娘の婿」1 名（0.2%）、「孫（男）」1 名（0.2%）、「孫（女）」1 名（0.2%）、「その他」4 名（0.9%）、不明 1 名（0.2%）であった。

## 2. 回答分布

### 2-1. 高齢者の依存（dependency）の程度

高齢者の Barthel Index（ADL）の回答分布は、表 1 に示した。回答カテゴリ 1「自立」に着目すると、「入浴」や「階段昇降」の自立者の割合が若干低い傾向にあったものの、「歩行（車椅子）」、「整容」といった項目では自立者の割合が高い傾向にあった。

### 2-2. 介護者の老親扶養意識

家族介護者の老親扶養意識に関する回答分布は、表 2 に示した。回答カテゴリ「そう思う」に着目すると、「老親が生活費に困らないように、子どもが経済的に援助するのは当然である（42.9%）」、「老親が日頃必要とするお小遣い

表 1 要介護高齢者の Barthel Index の回答分布

項 目	回答カテゴリ				
	カテゴリ 1	カテゴリ 2	カテゴリ 3	カテゴリ 4	不明
X 1. 食事	271(58.7)	147(31.8)	43( 9.3)		1(0.2)
X 2. 移乗	250(54.1)	146(31.6)	34( 7.4)	30( 6.5)	2(0.4)
X 3. 整容	297(64.3)	161(34.8)			4(0.9)
X 4. トイレ動作	260(56.3)	101(21.9)	97(21.0)		4(0.9)
X 5. 入浴	229(49.6)	231(50.0)			2(0.4)
X 6. 歩行（車椅子）	287(62.1)	103(22.3)	12( 2.6)	58(12.6)	2(0.4)
X 7. 階段昇降	195(42.2)	168(36.4)	98(21.2)		1(0.2)
X 8. 更衣	264(57.1)	130(28.1)	68(14.7)		0(0.0)
X 9. 排便自制	268(58.0)	141(30.5)	51(11.0)		2(0.4)
X 10. 排尿自制	267(57.8)	147(31.8)	47(10.2)		1(0.2)

注) 「食事」「更衣」：カテゴリ 1「自立」、カテゴリ 2「部分介助」、カテゴリ 3「全介助」

「移乗」：カテゴリ 1「自立」、カテゴリ 2「軽度介助」、カテゴリ 3「ほぼ全介助」、カテゴリ 4「全介助」

「整容」「入浴」：カテゴリ 1「自立」、カテゴリ 2「部分介助または全介助」

「トイレ動作」：カテゴリ 1「自立」、カテゴリ 2「部分介助」、カテゴリ 3「全介助または不可能」

「歩行（車椅子）」：カテゴリ 1「自立」、カテゴリ 2「介助監視」、カテゴリ 3「車椅子で自立」、カテゴリ 4「全介助」

「階段昇降」：カテゴリ 1「自立」、カテゴリ 2「介助監視」、カテゴリ 3「不可能」

「排便自制」「排尿自制」：カテゴリ 1「失禁なし」、カテゴリ 2「時に失禁あり」、カテゴリ 3「失禁あり」

老親扶養意識と介護に関連するストレス評価の関係

表2 老親扶養（義務）意識に関する回答分布

項 目	回答カテゴリ					
	そう 思わない	あまり 思わない	どちら もい えない	やや そう 思う	そう 思う	不明
X 1. 老親が必要とするなら、子どもは無理してでも経済的に援助すべきである	6(1.3)	56(12.1)	123(26.6)	149(32.3)	124(26.8)	4(0.9)
X 2. 老親が日頃必要とするお小遣いのことで、子どもは不自由な思いをさせてはならない	3(0.6)	21( 4.5)	77(16.7)	178(38.5)	181(39.2)	2(0.4)
X 3. 老親が介護を子どもに要求するのは当然である	7(1.5)	42( 9.1)	108(23.4)	145(31.4)	159(34.4)	1(0.2)
X 4. 子どもは、老親に旅行や趣味活動の機会を用意してあげるべきである	7(1.5)	43( 9.3)	110(23.8)	173(37.4)	127(27.5)	2(0.4)
X 5. 子どもが将来の老親の経済的支援のために普段から貯蓄するのは当然である	9(1.9)	76(16.5)	109(23.6)	148(32.0)	119(25.8)	1(0.2)
X 6. 老親が生活費に困らないように、子どもが経済的に援助するのは当然である	2(0.4)	25( 5.4)	72(15.6)	161(34.8)	198(42.9)	4(0.9)
X 7. 老親の介護を他人に任せることは、子どもなら恥ずべきことである	29(6.3)	86(18.6)	104(22.5)	116(25.1)	125(27.1)	2(0.4)
X 8. 子どもは老親の病気の治療費、入院費、福祉サービス利用料を負担すべきである	7(1.5)	35( 7.6)	88(19.0)	153(33.1)	178(38.5)	1(0.2)

表3 介護負担感（Family Caregiver Burden Inventory）に関する回答分布

項 目	回答カテゴリ			
	まったく ない	ときど きあ る	しばし ばあ る	不明
X 1. 介護に必要な費用が家計を圧迫していると感じる	94(20.3)	265(57.4)	99(21.4)	4(0.9)
X 2. 介護のために、趣味や学習などの個人的な活動に支障をきたしている	67(14.5)	199(43.1)	191(41.3)	5(1.1)
X 3. 適切に介護しているにもかかわらず、要介護者から感謝されていないと感じる	154(33.3)	234(50.6)	68(14.7)	6(1.3)
X 4. 要介護者を見るだけでイライラする	162(35.1)	250(54.1)	45( 9.7)	5(1.1)
X 5. 介護のために、社会的な役割が果たせず、不安になる	123(26.6)	242(52.4)	89(19.3)	8(1.7)
X 6. 介護に追われ、家族や親族との関係がだんだん疎遠になると感じる	176(38.1)	204(44.2)	76(16.5)	6(1.3)
X 7. 介護に関わる出費のために、余裕のある生活ができなくなったと感じる	136(29.4)	212(45.9)	109(23.6)	5(1.1)
X 8. 要介護者の介護には費用がかかりすぎると感じる	123(26.6)	231(50.0)	102(22.1)	6(1.3)
X 9. 要介護者に対して、費用を忘れてしまうほど頭に血がのぼるときがある	193(41.8)	216(46.8)	48(10.4)	5(1.1)
X 10. 要介護者の言動に、どうしても理解に苦しむときがある	110(23.8)	277(60.0)	69(14.9)	6(1.3)
X 11. 介護のために、自分自身のための自由な時間がとれない	83(18.0)	242(52.4)	133(28.8)	4(0.9)
X 12. 介護のために、貯蓄していたお金までも使い、将来の生活に不安を感じる	185(40.0)	201(43.5)	70(15.2)	6(1.3)



のことで、子どもは不自由な思いをさせてはならない (39.2%)」「子どもは老親の病気の治療費、入院費、福祉サービス利用料を負担すべきである (38.5%)」といった経済的援助に関する項目の回答割合が高くなっていた。

### 2-3. 介護者の介護負担感

介護者の介護負担感に関する回答分布は、表3に示した。回答カテゴリ「しばしばある」に着目すると、「介護のために、趣味や学習などの個人的な活動に支障をきたしている (41.3%)」、「介護のために、自分自身のための自由な時間がとれない (28.8%)」といった介護者自身の活動の制限感に対する項目の回答割合が高い傾向にあり、反対に「要介護者を見るだけでイライラする (9.7%)」、「要介護者に対して、我を忘れてしまうほど頭に血がのぼるときがある (10.4%)」といった要介護者に対する拒否や怒りに対する項目の回答割合は低くなっていた。

表4 介護肯定感に関する回答分布

項 目	回答カテゴリ				
	まったく そう 思わない	あまり そう 思わない	やや そう思う	非常に そう思う	不明
X 1. 要介護者の世話を義務感からでなく、望んでしている	76(16.5)	168(36.4)	161(34.8)	53(11.5)	4(0.9)
X 2. 要介護者といるのが楽しいと感じる	87(18.8)	226(48.9)	113(24.5)	30( 6.5)	6(1.3)
X 3. 要介護者の世話をするのが、自分の生きがいに なっている	100(21.6)	214(46.3)	118(25.5)	27( 5.8)	3(0.6)
X 4. 要介護者を世話することによって、満足感がえ られる	83(18.0)	221(47.8)	118(25.5)	36( 7.8)	4(0.9)
X 5. 世話をすることで、要介護者と親密になったよ うに感じる	62(13.4)	164(35.5)	171(37.0)	61(13.2)	4(0.9)
X 6. 要介護者が何か小さなことに喜ぶのを見て、嬉 しくなる	28( 6.1)	72(15.6)	236(51.1)	120(26.0)	6(1.3)
X 7. 要介護者を世話していて、逆に自分が元気づけ られたり、励まされたりする	63(13.6)	178(38.5)	165(35.7)	53(11.5)	3(0.6)
X 8. 要介護者が世話に感謝したり、喜んでると感 じる	45( 9.7)	115(24.9)	216(46.8)	82(17.7)	4(0.9)
X 9. 介護のおかげで難しい状況に対処する力など、 自信がついた	50(10.8)	177(38.3)	170(36.8)	60(13.0)	5(1.1)
X 10. 要介護者の世話をすることで、学ぶことがたく さんある	41( 8.9)	142(30.7)	196(42.4)	79(17.1)	4(0.9)
X 11. 介護をすることは、自分の老後のためになると 思う	41( 8.9)	145(31.4)	187(40.5)	85(18.4)	4(0.9)
X 12. 介護のおかげで人間として成長したと思う	38( 8.2)	133(28.8)	208(45.0)	79(17.1)	4(0.9)

#### 2-4. 介護者の介護肯定感

家族介護者の介護肯定感に関する回答分布は、表4に示した。回答カテゴリ「非常にそう思う」に着目すると、「要介護者が何か小さなことに喜ぶのを見て、嬉しくなる (26.0%)」、「介護をすることは、自分の老後のためになると思う (18.4%)」といった精神的な高揚感や自己の成長に関する項目でその回答割合が高く、反対に「要介護者といえるのが楽しいと感じる (6.5%)」、「要介護者の世話をすることが、自分の生きがいになっている (5.8%)」、「要介護者の世話をすることによって、満足感がえられる (7.8%)」といった介護に対する満足感や充足感に関する項目ではその回答割合が低くなっていた。

### 3. 高齢者の ADL、介護者の手段的援助意識、介護肯定感および介護負担感との関係性

図1で示した仮説モデルのデータに対する適合度を構造方程式モデリングにより検討した。ただし、統計解析では、回収された462名のうち、介護者の性、年齢、要介護高齢者の性、年齢に加えて、前記4つの測定尺度に欠損値を有さない350名を用いた。

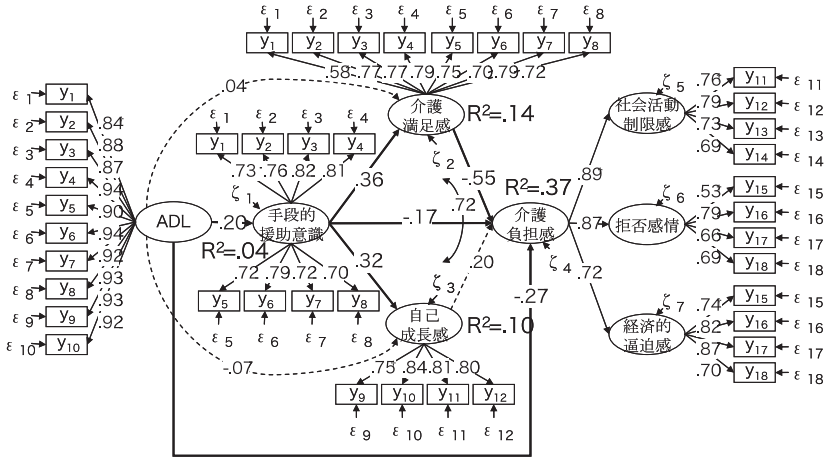
その結果、モデルのデータに対する適合度は  $\chi^2(df) = 236.093 (96)$ 、CFI = 0.92、TLI = 0.97、RMSEA = 0.06 と概ね良好な数値であった (図2)。

この結果は、手段的援助意識とADLは有意な正の関係性 (.20) を示し、高齢者のADLが高いほど老親扶養意識のうちの手段的援助意識も高い傾向にあることを意味している。ただし、反対の意味では、要介護高齢者のADLが低いと、手段的援助意識も低い傾向にあることを意味している。

また、介護肯定感 (介護満足感と自己成長感) は潜在的ストレスラーとして仮定したADLからは影響を受けず、手段的援助意識 (介護満足感に対して .36、自己成長感に対して .32) と有意な正の関連性を示していた。この結果は、手段的援助意識が高いほど、介護状況に対する満足感や自身の成長感を強く感じていることを意味している。

最後に、介護負担感に対しては、介護肯定感のうち介護満足感 (-.55)

老親扶養意識と介護に関連するストレス評価の関係



$\chi^2(df) = 236.093 (96)$ , CFI=0.92, TLI=0.97, RMSEA=0.06

ADL 10項目, 手段的援助意識 8項目, 介護負担感 12項目, 介護肯定感 12項目に欠損値がない 350名

図2 介護負担感と老親扶養（義務）意識との関連性

が、また手段的援助意識 (-.17) と ADL (-.27) が有意な負の影響を示していた。この結果は、介護満足感、手段的援助意識を強く感じている者ほど、さらに ADL が良好な要介護高齢者を介護している者ほど、介護負担感は低い傾向にあることを意味している。他方、このような直接効果のみならず、ADL が手段的援助意識や介護満足感を介して介護負担感に影響するプロセスが存在する可能性、すなわち介護負担感というアウトカムに到達するまでにいくつかの複数の経路が存在し、それらを通じて介護負担感が規定される可能性が示唆された。

なお、手段的援助意識、介護満足感、自己成長感、介護負担感に対する説明率は、それぞれ 4%、14%、10%、37% であった。

#### IV. 考 察

従来の老親扶養に関する研究は、老親に対し、韓国系<sup>(9)~(13)</sup>あるいは中国系

のアメリカ人が他のアメリカ人に比して高い扶養意識を示すことを指摘している。他方では、最近、韓国や中国でも、日本と同様に、核家族化が産業化や都市化等を背景に急速に進行し、国民の老親扶養に対する意識が変化しはじめている<sup>(14)~(15)</sup>ことを指摘した報告が認められる。このようなことを背景に、本調査研究は、韓国データを基礎に、在宅高齢者の家族介護者の老親扶養意識がストレスサーである要介護高齢者の身体機能の低下とストレス評価のプロセスにあって、どのような機能を有するかを明らかにすることを目的に行なった。

調査対象の選定に際しては、韓国の地域特性を考慮したが、構造方程式モデリングを採用する場合は、極端な場合はサンプルに偏りがあっても、予め仮定した因果関係モデルがそのデータに適合することが重要であり、そのことを検証するためには、通常、150前後以上のデータがあれば推測が可能とされている。その意味で、本調査研究の解析に資することができたデータ数は、十分であったと判断された。なお、構造方程式モデリングでは、各潜在変数等の変数間の関係を誤差を取り除いて算出できることを特徴としていることから、前記統計解析方法の選択は、より現実的な関連性を得ることに貢献したと推察される。加えて、各種変数の測定には、すでに信頼性や妥当性、特に概念的次元性を問題とする因子構造モデルの側面から見た構成概念妥当性が十分検討されている尺度を用いた。従来の欧米の研究に着目すると、一般に、家族による老親扶養は、金銭や物質による経済的扶養と、老人の心身の条件に対応した身の回りの世話や病気の看護などを含んでいる<sup>(16)(17)</sup>とされてきたものの、その意識を多次的に測定する尺度は開発されていない。それに対し、日本では、すでに「老親扶養義務感測定尺度」<sup>(18)</sup>の開発がなされ、それは「経済的援助 financial support」、「身体的補助 physical aids」、「情緒的支援 mental support」の3因子で構成されている。しかし、その尺度は必ずしも東アジア地域で使用することを前提にプールした調査項目で構成されているわけではないこと、加えて、探索的因子分析で抽出された前記因子は「方向因子」<sup>(19)</sup>であることの危険性が払拭できないことから、本調査研究では、著者等が開発した尺度を採用した。

その結果、第一に、高齢者の ADL は、直接介護負担感に影響するのではな

く、老親扶養意識のうちの手段的援助意識を経由して影響することが明らかにされた。つまり高齢者の機能低下は介護者の扶養意識を低下させる方向に機能し、さらにその扶養意識の低下が介護負担感を高める、すなわち介護に先行して存在すると仮定される内的資源は、常に一定の常態を維持しているわけではなく、高齢者のADLの低下が発生することで、あたかも意識下にあった扶養意識が触発されたかのような形で現われ、低下し始めると仮定できるものと推察された。他方、介護者の老親扶養の理想と現実のギャップが、介護者のストレスの否定的認知を誘発するものとも解釈できる。このような結果は、潜在的なストレス源にとってそれよりも以前に形成されている個人に内在化している先行条件が間接効果を有することを意味しており、それはラザルスのストレス認知理論を支持する結果と言えよう。このことは、先行条件としての老親扶養意識が高く形成されていることで、介護に伴う介護負担感は軽減する可能性があることを意味しており、老親に対する扶養意識を涵養することは、それなりに意味があると言えるが、その介護場面に於ける介護負担感に対する直接的な影響度は、単独ではさほど大きくないことを認識しておく必要がある。

ただし、第二に、扶養意識は、介護負担感に直接的な影響度をもつが、それはさらに介護肯定感（あるいは内的資源としては相互関係にある可能性は否定できないが）のうちの介護満足感を媒介することで、結果的に家族介護者の介護満足感が介護負担感が軽減するという仮説を支持する、すなわち、従来のCicarelli<sup>(1)</sup>の介護の動機付けに関する仮説モデルを支持するものであった。しかし、扶養意識は介護肯定感のうちの自己成長感に対しては影響を有するものの、介護負担感に対する媒介効果は示さなかった。しかし介護満足感と自己成長感の間には強い関連性が認められていることを勘案するなら、介護肯定感を媒介して、扶養意識が効力を有していることは否定できないものと推察される。

以上のふたつの研究結果を総合すると、本研究において取り上げた老親扶養意識のうちの手段的援助意識は、潜在的ストレスとストレス評価のうちの介護負担感との間にあって間接効果を示すものの、さらに介護満足感に対して

も影響を及ぼし、その介護満足感を經由することで、結果的に介護負担感を軽減させる機能を有しているものと推察された。すなわち、扶養意識を介護のストレス問題に導入するに際しては、Cicirelli の介護の動機付けに関する仮説モデルを取り込んだストレス認知理論に依拠しつつ、本研究で支持された因果関係のモデルに、さらに外的資源としての社会福祉的介入を導入することで、あらたな東アジア型ソーシャルモデルの実証的な検討が可能になるものと言えよう。

なお、本調査研究の結果に従うなら、臨床的にはさらに介護肯定感あるいはその下位概念である介護満足感を高める要因（既存の社会福祉サービスもしくはそのあらたな開発を含めて）探索することは、結果的に、家族介護者の介護負担感を低下せしめ、従来の研究（文献）が示してきたように、介護を担当している家族では、ストレス反応としての抑うつ depression が一般サンプルと比較して2倍以上発現している<sup>(20)</sup>、といった状況を解決する上で、重要な課題と位置づけられよう。

## 文献

- (1) Cicirelli VG.: Attachment and obligation as daughters' motives for caregiving behavior and subsequent effect on subjective burden. *Psychol Aging*. 8(2) : 144-55, 1993.
- (2) Mahoney FI, Barthel DW. Functional evaluation : the Barthel Index. *Md Med State J*, 14 : 61-65, 1965.
- (3) 桐野匡史・筒井孝子・中嶋和夫・小山秀夫：介護福祉施設利用者の ADL に関する経年的変化の傾向分析. *介護経営*, 1(2), 92-100, 2006.
- (4) 桐野匡史・柳漢守・尹靖水・黒木保博・中嶋和夫：同居家族における家族凝集性と老親扶養意識の関係. : 岡山県立大学保健福祉学部紀要. (2007年12月受理)
- (5) Sadanori Higashino・Takako Tsutui・Masafumi Kirino・Yuki Yajima・Yong-Taek Ki・Kazuo Nakajima : Development of the Family Caregiver Burden Inventory (FCBI). *International Journal of Welfare for the Aged*, 9, 1-14, 2003.
- (6) 櫻井成美：介護肯定感<sup>が</sup>もつ負担軽減効果. *心理学研究*, 70(3), 203-210, 1999.
- (7) Lazarus R. S., Folkman, S.: *Stress appraisal, and coping*. Springer, New York (1984).
- (8) 豊田秀樹. 共分散構造分析 疑問編－構造方程式モデリング－, 朝倉書房, 東京, 2003.

- (9) Kim JH, Theis SL. : Korean American caregivers : who are they? *J Transcult Nurs*, 11 (4), 264–273, 2000.
- (10) Lee YR, Sung KT. : Cultural influences on caregiving burden : cases of Koreans and Americans. *Int J Aging Hum Dev*, 46(2), 125–141, 1998.
- (11) Lee YR, Sung KT. : Cultural differences in caregiving motivations for demented parents : Korean caregivers versus American caregivers. *Int J Aging Hum Dev*, 44(2), 115–127, 1997.
- (12) Sung KT. : Motivations for parent care : the case of filial children in Korea. *Int J Aging Hum Dev*, 34(2), 109–124, 1992.
- (13) Sung KT. : A new look at filial piety : ideals and practices of family-centered parent care in Korea. *Gerontologist*, 30(5), 610–617, 1990.
- (14) 張燕妹 : 中国における高齢者扶養意識の研究 : 北京市の若者に対する意識調査を通して. *社会学論叢*, 3, 81–101, 2003.
- (15) 金榮基 : 韓国の高齢化社会における儒教文化と扶養意識の変化. *文明*, 3, 21–31, 2003.
- (16) Seelbach WC, Sauer WJ. : Filial responsibility expectations and morale among aged parents. *Gerontologist*, 17(6), 492–499, 1997.
- (17) Finley NJ, Roberts MD, Banahan BF 3 rd. : Motivators and inhibitors of attitudes of filial obligation toward aging parents. *Gerontologist*, 28(1), 73–78, 1988.
- (18) 太田美緒・甲斐一郎 : 老親扶養義務感尺度の開発. *社会福祉学*, 42(2), 130–138, 2002.
- (19) 杉浦義典・丹野義彦 : 抑うつ尺度の因子構造—逆転項目と抑うつ項目は同一次元を形成するか. *性格心理学*, 8(1), 72–73, 1999.
- (20) Tennstedt S, Cafferata GL, Sullivan L. : Depression among caregivers of impaired elders. *J Aging Health* 1992 Feb ; 4(1) : 58–76

## A Study on the Relations of Stress Evaluation Related with Consciousness of Supporting and Caring the Aged

Jungsoo Yoon, Kazuo Nakajima, Jung-Suk Kim,  
Ki-Wook Um, Yasuhiro Kuroki

This study based on the Korean data has been cultivated to examine that how consciousness of main supporters for the aged living at home has been worked as an effective variable in the process of lowering of the aged ward's physical functions and stress evaluation. The data has been collected from supporters of the aged living at home in small and medium-sized cities, Changwon Gyeongsangnamdo, Cheonan Chungcheongnamdo, and Suncheon Jeollamando in Korea.

The questionnaire for this study is composed of supporter's sex and age, the aged ward's sex and age, relations between the aged and supporters, the aged ward's living dependency, supporter's consciousness of caring the aged, burdening of caring, and affirmativeness of caring. For this study, it has been mainly hypothesized that ADL have directly effected to burdening of caring alone, and also the ADL have been worked out as burdening of caring mingled with instrumental supporter's consciousness of caring or affirmativeness of caring.

The collected data is analysed by Structural Equation Model. The results are as follows ; firstly, the data is suitable to the hypothesized model, secondly, the instrumental supporter's burdening of caring has indirectly effected between the aged ward's ADL and carer's burdening of caring, and has directly effected to affirmativeness of caring and burdening of caring. Finally, it is discussed that East-Asian social work models could be developed within the context of consciousness of supporting the aged.